A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

48

ムージル

若いテルレスの惑い　吉田正己訳

ヴェロニカ

グリージャ

ブロッホ

夢遊の人々　菊盛英夫訳

中央公論社

世界の文学　48　　©1966

ムージル
ブロッホ

訳者　吉田正己
　　菊盛英夫

昭和41年11月1日初版印刷
昭和41年11月10日初版発行　　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　矢嶋製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

ムージル
若いテルレスの惑い　3
ヴェロニカ　171
グリージャ　215
ブロッホ
夢遊の人々　243
解説　570
年譜　594

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

若いテルレスの惑い

わたしたちは、何かを口に出すと、すぐにそれを奇妙に無価値なことと思ってしまう。自分では深淵の奥深くまでもぐったつもりでいるが、また水面にあがってみると、わたしたちの青白い指先についている水滴は、それが生まれた海とは似ても似つかないものになっている。わたしたちはすばらしい宝の庫を発見したと思いこんで、人前に出してみると、にせの宝石やガラスの破片を持ちかえったにすぎないことがわかる。それにもかかわらず、やみのなかで不変の輝きを発するのが宝なのだ。

マーテルリンク

ロシアに通じる鉄道に沿った小駅。

広い路面の黄いろの砂利の上を、四本並んだレールが、右にも左にも、果てしなくまっすぐに伸びている。どのレールのわきにも、機関車の排気で焦げた地面の黒い点点が、よごれた影のように続いている。

ペンキをぬった低い駅舎の後ろに、踏みならされた広い道が、駅の構内まで通じている。道のふちは、あたり一帯の踏みかためられた地面とつながっていて、二列に並んだアカシアの並木によってそれとわかるにすぎない。そのアカシアは、ほこりとすすにいためつけられたかさかさの葉をつけて、悲しげに道の両わきに立っているのだった。

この悲しげな色のせいか、また、午後の日ざしの、もやにかすんで青ざめた、弱々しい光がそうさせるのか、あたりの物体も人間も、人形芝居の場面を思わせるように、気のぬけた、血の通わない機械じみた感じを与えていた。ときどき、一定の間をおいて、駅長が事務室から出てきては、延々と続く線路ぞいに、きまったしぐさで頭を動かしながら、踏切番小屋の信号を見やるのだが、国境でひどく遅延した準急列車の接近している様子が、信号からはいまだにうかがえないのだった。すると駅長は、いつも同じ腕の動作によって、懐中時計をとり出し、頭を横に振ると、また姿を消すのだった。それはちょうど、きまった時間が来ると、古い塔のしかけ時計の人形が、出たりはいったりするのに似ていた。

線路と駅舎のあいだの、踏みかためられた広い地面を、若い人たちの楽しそうな一団が、中年の夫妻をあいだにはさんで、ぶらぶら歩いていた。その夫妻は、いくぶん大声でかわされているおしゃべりの中心になっていた。しかし、この一団の楽しげな様子も、本物ではなかった。愉快そうにどっと笑う声は、ほんの数歩も進めば、早くも静まりかえってしまうように思われた。いわば、目に見えない、強靱な抵抗にぶつかって、ぴたりと静まるかのように感じられたのだ。

四十に手が届くか届かないくらいのその婦人は、テルレス宮中顧問官夫人で、日のつんだヴェールの奥に、泣いたためにすこし赤くなった、悲しげな目を隠していた。別れの時が迫っていたのだ。彼女にとって、一人むすこをまた長いあいだ、他人のなかに残しておかなければならないのは、つらいことだった。自分で面倒を見ながら、かわいいむすこを見まもってやることができないからで

ある。

ところで、この小さな町は自分たちの住む場所から遠く離れており、オーストリア帝国の東部で、人口が少なく地味の乏しい農作地帯にあった。

テルレス夫人が、住むに適さない遠い異郷と知りながら、がまんして自分のむすこをそこに住まわせざるをえない理由というのは、この町に有名な全寮制の学校があったからである。この寄宿寮は、前世紀に、その教会所属の土地に建てられて以来、その不便な場所に置かれたままになっていた。おそらく、発育ざかりの青少年を、大都会の有害な影響から守るためであろう。

それにここでは、この国の上流家庭の子弟たちが教育を受け、この学校を卒業すると、大学にはいったり、軍務や官途についたりしたが、これらのどの道を選ぶ場合でも、また、上流社会に仲間入りするためにも、このW町の寄宿学校で育ったということが、太鼓判つきの保証のように見なされていた。

そのためにテルレス夫妻は、四年前決心して、むすこの野心に燃えた願いをかなえてやろうと、骨折って入学許可を取ってやったのであった。

ところが、この決心のために、のちにはさんざん泣かされることになった。というのは、学校の門が彼の後ろで閉まって、二度ととりかえしのつかない気がしたほとんどその瞬間から、テルレス少年は、やりきれないほどはげしいホームシックにとりつかれたからである。授業時間も、庭の広々として草の生い茂った原っぱでの遊戯も、また、学校が生徒たちに与えるほかの娯楽も、彼の心をひきとめることはできなかった。彼はほとんどどれにも身を入れてやらなかった。彼はすべてを、まるでヴェールごしのようにぼんやりとしか見ていなかった。昼間はしばしば、あとからあとから涙がこみあげてくるのを、自分でこらえようとして苦労したが、晩にはいつも、涙を流しながら寝入るのだった。

ほとんど毎日彼は、せっせとうちへ手紙を書いた。この手紙のなかだけに彼は生きていたのだ。自分のするほかのことはすべて、とりとめもない無意味なできごとしか、彼には思えなかった。時計の文字盤が示す数字のように、どうでもよい中継点と思われたにすぎない。しかし手紙を書く場合には、彼は自分のなかに、きわだったもの、独自なものを感じていた。すばらしい太陽の光と色彩にあふれる鳥のようなものが、彼の心のなかで、毎日毎日彼を冷たく無関心にとりまいている灰いろの感覚の海から頭をもたげるのだ。そこで昼間彼は、遊んでいるときでも、授業中でも、今晩手紙を書くぞと考えると、まるで、目に見えない鎖のついた金の鍵をひそかに持っているような気がして、だれも見ていなければ、そ

の鍵でみごとな庭園の門を開いてやろう、と思うのだった。

そのさい奇妙だったのは、思いもかけず身を焼きつくすほどに、両親への愛慕の念がつのったのは、彼自身にとってはじめてで異様な経験だった、という点である。以前には彼は、自分がそんな感情を抱こうなどとは予感したこともなかった。彼は喜び勇んでこの寄宿学校にはいったのだった。それどころか、最初の別れのさいに、母親が涙にくれてとり乱さんばかりになったときも、彼は笑い声をたてていた。ひとりぼっちになって何日間かはかなり快適に過ごしたのだが、そのあとになってから、突然、いかんともしがたい力で、彼の心に爆発が起きたのである。

彼はそれを、ホームシック、両親を求める気持だと考えた。しかし実際は、もっとあいまいで、もっとこみいったものであった。というのは、〈このあこがれの対象〉である両親の姿が、どう見てもそこにはもはや全然含まれていなかったからだ。わたしが言うのは、自分の愛する人物に対して抱く、ただ記憶のうえだけでなく、肉体的性質をも帯びた、いわば立体的追憶のことである。こういう思い出は、あらゆる感覚に語りかけ、あらゆる感覚のなかに保たれているから、たとえ何をしていようと、口もきかず、目にも見えないのに、相手がつねに自分のそばにいるのを感じてしまうのだ。この種の思い出は、ほんのしばらくのあいだだけ空気をふるわせつづける反響のように、まもなく消えてしまった。たとえば、そのころのテルレスは、〈なつかしい、なつかしいおとうさんおかあさん〉――彼はたいていこんなふうにつぶやくのだったが――の姿を目のあたりに浮かべることはもはやできなくなっていた。

彼が両親の姿を思い浮かべようとすると、そのかわりに、かぎりない苦痛が心に生じて、その苦痛に満ちたあこがれが、彼をさいなみながらも、あくまで彼をとらえて放そうとしない。それは、あこがれの熱烈なほのおが、彼をいためつけると同時に、恍惚とさせもしたからだ。その場合、両親を思う彼の気持などは、ますます、この自己中心的な悩みを自分でつくりだすための単に偶然の原因になってしまった。この悩みが彼を、まるで礼拝堂の静寂（その静寂のなかでは、燃えている数多くのろうそくや、聖画聖像の何十もの目から、自分自身をせめさいなむ人たちの苦痛のなかへ、心地よい慰さめがしのびよってくるものだが……）のなかへ閉じこめるかのように、彼の心を淫蕩なまでのうぬぼれのなかへ押しこめてしまったのである。

やがて彼のいわゆる〈ホームシック〉が、さほど激しいものでなくなり、次第にうすれていくと、かえってそ

の正体がかなりはっきりわかるようになった。〈ホームシック〉の消滅は、今度こそと期待していた幸福感をもたらしてはくれずに、テルレス少年の心に空虚感を残していった。そして、心のなかに無を、満たされぬものを感じた彼は、自分からなくなったものが、単なるあこがれではなくて、何か積極的なものであり、精神の力だったことがわかった。それは、彼の心のなかで、苦痛にかこつけて、最後の死に花を咲かせた何ものかであったのだ。

しかし、それはもはや終わった。こうして、最初の幸福感の源泉は、それが涸渇することによってはじめて、その存在が彼に感じられたのである。

この時分には、彼の書く手紙から、目ざめかけていた心の激情的表現が姿を消して、そのかわりに、学校生活や新しくできた友だちについてのくわしい描写が見うけられた。

彼自身は、そうしながら、まだ実を結ばない花を咲かせたあとで、最初の冬を経験する若木のように、自分が見すぼらしくて寒々としているのを感じた。

ところが、彼の両親にはそれで満足だった。彼らは彼を、前後の考えもなく、ただ強い動物的愛情で可愛がっていたのである。彼が学校から休暇をとるたびに、休暇のあとでいつも宮中顧問官夫人は、またもや、うちじゅうがからっぽになって、みんなが死に絶えたような気がしたものである。いつもむすこが訪ねてきたあと数日間というもの、彼女は目に涙をためていろいろな部屋を歩きまわって、むすこの目がそそがれたり、むすこの指ににぎられた品物のあれこれを、いとしそうにさわってみるのだった。この夫妻は二人とも、むすこのためだったら、わが身が八つ裂きにされてもかまわない人たちだった。

むすこの手紙に不器用につづられた感動や、ひたむきに反抗的な悲愴調は、両親の心を痛ませて、彼らを神経過敏の状態におとしいれた。快活で満足した気軽な調子がそれにつづいて書かれると、両親はまたうきうきとして、これで危機が克服されたと感じ、力いっぱいむすこに声援を送ったものである。

どちらの場合にも彼らは、それが一定の心的発達の徴候であるとは思わないで、むしろ、苦痛も安堵も同様に、現在の状態の当然の結果だとして、そのまま真に受けていた。実はそれは、自分の足で立たされた若い人間が内面の力を発展させようとして、はじめて行なって失敗した試みだったことを、両親は見のがしていたのである。

……

いまやテルレスは、自分をきわめて不満なものに感じ、自分の支えとして役立つかもしれない新しいものを求め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

て、あちこち手探りしてみたが、むだであった。

……

この時期のあるエピソードは、当時テルレスの心のなかで、のちの発展のために準備されつつあったものを知るためには、特徴的である。

つまり、ある日のこと、H侯爵の御曹子が学校にはいってきた。彼は、オーストリア帝国でもっとも古く、もっとも保守的で、もっとも勢力のある貴族の家柄の出であった。

ほかのみんなは、彼のおだやかな日つきが気取っていて興ざめだ、と思っていた。立っているときに腰をひねったり、しゃべるときにゆっくり指を動かす彼のやり口を、みんなは女性的だといって笑った。しかし、とくにみんなが悪く言ったのは、彼を学校に連れてきたのが、彼の両親ではなくて、彼のいままでの先生、つまり神学のドクトル称号をもつ教団神父だったという点である。

ところでテルレスは、最初の瞬間から強い印象を受けていた。ことによるとそれには、相手が宮中に参内する資格のある公子だ、という事情が影響を与えたのかもしれない。いずれにしても、テルレスがそこで知り合いになったのは、まるで別種類の人間であった。

古い地方貴族の城にただよう沈黙、宗教的に訓練された無言の行、何かそうしたものが彼にはまだつきまとっているように思われた。歩くとき彼は、ものやわらかでしなやかな動作をするのだった。つまり、いくぶん遠慮がちに身をちぢめて小さくなるのだが、それは、姿勢正しく歩きながら、人気のない広間をつぎつぎに通っていく習慣から生じた特有のやりかたである。こうすれば、人のいない部屋の見えにくいすみのところで、ほかの人にぶつかられることはまずないような気がする。

公子とつきあうのは、テルレスにとって、心理的な微妙な楽しみの源泉になった。そのつきあいのおかげで、テルレスの心に、一種の人間認識の道が開かれたのである。つまり、声のさがりかたによって、何かを手にとるしぐさによって、さらに、沈黙の音色や、ある空間に自分を順応させるからだの格好によってさえも、相手が何者かを知り、相手を楽しむことを教えられたからである。言いかえれば、精神的・人間的なものであるというありかたは、動きやすくて、ほとんどとらえがたいが、しかし、それこそ人間本来の完全なありかたであり、核心、つまり、つかまえて論じられるもののまわりを、はだかの骨格をとりまくように、とりかこんでいる。そこで、このありかたに応じて、相手を認識し、楽しむには、相手の精神的人格を前提としないわけにはいかないのである。

テルレスはこの短期間中、牧歌的とも言えるような生

活を送った。彼はこの新しい友人の信仰心にかくべつ反発を感じなかった。とはいっても、自由思想的な市民の家に生まれた彼にとっては、その信仰心は本来まったく無縁のものであった。彼はむしろ、なんの躊躇もせずにその信仰心を受けいれた。それどころか、その信仰心こそ、公子の特別な長所であるように、彼の目には映じたのである。なぜなら、そのおかげで、その人間の人格が高められて、自分などとは、およそ似ても似つかないし、くらべものにもならないものになっている、と感じたからである。

この公子といっしょにいると、彼は、道から離れたところにある礼拝堂にでもいるかのような気がした。すると、自分が本来そこの人間ではない、などという考えは、教会の窓ごしに日の光をながめたり、いわば相手の心のなかに積みあげられた、役に立たない金ぴかの装飾品にゆっくり視線を向けたりする楽しみを前にすると、自然に消滅してしまうのである。そしてついに、彼は相手の心について、自分なりにぼんやりしたイメージを浮かべるわけだが、それはあたかも、自分ではそんなことを考えてもみないのに、美しいがしかし、奇妙な法則によってもつれあった唐草模様を、指でなぞっているかのような気がするのである。

やがて突然、二人のあいだに破局がやって来た。

たかがばかげたことのために、とあとからテルレスは思わざるをえなかった。

つまり、彼らはやっぱり宗教上のことでけんかになったのだった。しかも、その瞬間には、すでにいっさいがごちゃごちゃになっていたのだ。というのは、まるでテルレスとは無関係のように、テルレスのなかの知性が、きゃしゃな公子に向かって、間断なくなぐりかかったからである。テルレスが公子に、分別くさい人間のあざけりをあびせかけ、公子の心が安住している精巧な建物を、野蛮にもうちこわしたので、二人は憤慨してたもとを分かったのだ。

そのとき以来、二人はお互いに口もきかなかった。おそらくテルレスは、自分が無意味なことをしたと、ぼんやり意識していたのであろう。明確ではないが感じのうえでの理解によって彼は、自分の融通のきかないこざかしい知恵が、まったく思わしくない時期に、微妙で楽しみに満ちたものを打ちくだいたことを知っていた。しかし、それは、彼の力ではどうにもならないものであった。過ぎたことに対する一種のあこがれが、いつまでも彼のなかに残っていたのではあるが、彼は、自分をそこからますます遠くへおしやる別の流れのなかに落ちこんでしまったように見えたのだ。

しばらくして、公子は、この学校にいることが健康に

さわったので、またそこから去ってしまった。

……

いまやテルレスのまわりは、まったく空虚で退屈になった。しかし彼は、そうこうするうちに大きくなっていって、初期の性的成熟が、おぼろげながら徐々に彼のなかで高まりはじめた。彼はこの成長期に、それにふさわしい、新しい友情を何人かの相手に抱くようになったが、それがあとから彼にとって、きわめて重要な意味をもつに至った。たとえば、バイネベルクやライティング、モテやホーフマイアーとの友情がそうである。きょう彼の両親を、彼といっしょに駅まで送っていったのは、ほかならぬこういう若い連中だったのだ。

奇妙なことに、この連中は、彼の学年でいちばん悪い生徒たちばかりだった。才能があったし、むろん良家のむすこたちでもあったが、時とすると、粗野なほど乱暴で、手がつけられなくなるのだった。ほかならぬこういう連中とつきあうことに、テルレスがいま魅力を感じているのは、おそらく彼自身独立心が乏しい点に原因があったのであろう。公子から遠ざかって以来、テルレスはひどく独立心を失ってしまった。さらに、テルレスのいまのありかたは、あのときの方向転換の直線的延長の上にあるといってよかった。なぜなら、あのときと同じように、あまりにも鋭敏な感受性に対する恐れがそうさせていたからである。それにくらべると、ほかの友人たちの人柄は、健康で、しんが堅く、生命に忠実で、およそ違ったものだった。

テルレスはすっかり彼らの影響に身をまかせた。というのは、彼の精神的状況はおよそこんなものだったからである。つまり、彼の年齢になると、ギムナージウム（高等学校）ですでに、ゲーテ、シラー、シェイクスピア、さらに、ことによると現代作家までも読んでおり、何か書くと、それが消化不十分のまま、指先からあふれ出てしまう。ローマ人の悲劇が書かれたり、感情のきわめてこまやかな抒情詩が生まれたりする。ところでその抒情詩とは、すけて見えるレース細工の繊細な感じに似て、何ページにもわたりコンマやヒリオドの飾りをつけた衣裳をまとって、しゃなりしゃなりと歩いているようなしろものである。要するに、こういうことは、それ自体はこっけいであるが、しかし、確実な成長のためには、貴重な価値をもつものである。なぜなら、若い人たちは、この外部から与えられた連想や借りものの感情によってこそ、その年ごろの、危険なほど柔軟な心的基盤を乗りきることができるからだ。その年齢では、だれでも自分自身にとってなんらかの意味をもつものでなければいけないのに、ほんとうになんらかの意味をもつにしては、あまりにも未熟なのである。のちになると、ある人に、

その気持がいくらか残っているのに、ほかの人にはその気配すら残っていないとしても、それはどうでもよいことである。あとではだれでも、自分自身に甘んじてしまうから、危険があるのは、ただ過渡的な年齢だけなのだ。もしだれかが、そのような若者に、その人間のこっけいな点を教えてやることができるとしたら、その若者の立っている地面がくずれおちるか、あるいは、目の覚めた夢遊病者のように、突然、空虚以外の何ものも見えなくなって、若者が墜落するか、のいずれかであろう。

この種の幻想、成長のためのこのトリックが学校には欠けていた。というのは、学校の蔵書には、古典作家こそ含まれていたが、退屈なものと思われており、それ以外には、感傷的な小説集や、間のぬけた軍隊ユーモア集しかなかったからである。

テルレス少年は、書物への渇望から、これらの本をすべてきちんと読破したし、あれこれの小説から得た通俗的な恋愛観に読後しばらくとらわれることもままあったが、しかし、その読書は彼の性格に影響、真の影響を及ぼしはしなかった。

そのころの彼は、そもそも性格などもっていないように思われた。

たとえば彼は、それらの読物の感化で、自分でもときどき短かい小説を書いてみたり、空想的な叙事詩を創作しはじめたりした。すると、自分の描く主人公の愛の悩みに興奮して、彼の頬は赤らみ、脈は早鐘を打ち、目は輝くのだった。

しかし、ペンを手から放すと、いっさいのことが終わってしまった。いわば動きのなかだけに、彼の精神は生きていたのだ。だから、いついかなる時でも、どんな要求に応じてでも、詩や小説を書くことが、彼には可能でもあった。そのさい彼は興奮したが、それにもかかわらず、けっして本気になっていたわけではない。彼には自分の行動が重要なものには思えなかった。行動から彼の人格に影響を及ぼすものは何もなかったし、また、その行動は彼の人格から出たものでもなかった。彼はただ、なんらかの外的強制のもとに、ちょうど役者が役の強制を必要とするのと同じで、どうでもよいという感じをのりこえた感覚を抱いたにすぎない。

それは脳の反応だった。しかし、みんなが人間の性格またはたましい、線もしくは音色と感じているもの、いずれにせよ、それにくらべると、思考、決断および行動が、さほど特徴的でなく、偶然的で、入れかえがきくように見えるもの、たとえば、あらゆる常識的判断をこえたところで、テルレスを公子に結びつけていたもの、すなわち、最終的で不動のよりどころが、当時のテルレスにはまったく失われてしまったのだ。

彼の友人たちは、スポーツの楽しみという動物的な性質をもっていて、最後のよりどころなどの必要を全然感じていなかった。ちょうどギムナージウムで、文学をいじりまわすことがその代償行為になっているのと同様である。

ところがテルレスは、スポーツを好むにしては、あまりに精神的素質がかちすぎていたし、文学にこるにしては、借りものの情感のばかばかしさに対する過度の敏感さがさまたげになった。このような敏感さは、たえず言いあいやなぐりあいの覚悟を余儀なくされているこの学校での生活が生みだしたものであった。こうして彼の人柄には、何かあやふやなもの、つまり、自分で自分がわからないような無力感がつきまとうことになった。

彼は新しい友人たちと同調した。彼らの乱暴ぶりに威圧されたからである。彼は野心があったので、ときどき乱暴な点でも彼らをへこましてやろうと試みたことさえあった。しかしそのたびに彼は、中途半端に終わってしまい、そのために少なからずばかにされるはめになった。すると、それがまた彼をおじけづかせるのだった。この危険な時期における彼の全生活は、自分より男らしくて荒っぽい友人たちに負けまいとする努力のくりかえしと、心の奥では、こんな努力などどうでもよいと思う気持との連続にすぎなかった。

いまでは、彼の両親が尋ねてくると、彼は、両親とだけでいるかぎりは、おとなしくて控え目だった。母親がやさしくからだに触れようとすると、彼はそのたびに、別の口実を設けて、身を引くのだった。ほんとうのところは、両親のいいなりになってもかまわないと思っていたのだが、まるで友人たちの目が自分に向けられているかのように思って、彼は恥ずかしい気がしたのだ。

彼の両親はその態度を、成長期のぎごちなさだと思ってがまんしていた。

やがて午後になると、騒々しい連中の一団がやって来た。みんなはトランプをしたり、食ったり飲んだりし、また、宮中顧問官が自分の町から持ってきたたばこを吸うのだった。

この陽気なありさまを見て、顧問官夫妻は喜びもし安心もした。

むすこのテルレスには、時とすると、これとまるで違った面がある、ということを彼らは知らなかった。しかも最近では、そういう時期がますますひんぱんに起こっていたのだ。テルレスには、その学校での生活がまったくどうでもよくなる瞬間がよくあった。すると、彼の日ごろの心配ごとのいっさいが解消して、彼の生活のそれぞれの瞬間が、互いに内的な連関を保たずに、ばらばらに分解してしまうのだった。

彼はしばしば、長いあいだ――暗いもの思いにふけりながら――いわば自分自身の上にかがみこんですわっているのだった。

……

今度も両親の訪問は、二日間だった。みんなで食事をしたり、たばこを吸ったり、馬車であたりを一周したりした。さていま、急行列車が顧問官夫妻を、またもとの町に連れもどす時が来たのだ。

レールにかすかな車輪のひびきが伝わってきて、列車が近づいてくることを告げた。駅の建物の屋根にある鐘から聞こえてくる信号音が、遠慮会釈なく顧問官夫人の耳に鳴りわたった。

「それじゃいいですね、バイネベルク君、わたしのむすこに気をつけとってくれますな？」とテルレス顧問官は、若いバイネベルク男爵のほうに向いて言った。それは背の高い、骨ばった若者で、両耳がひどく起きあがっていたが、りこうそうな目つきは、表情に富んでいた。

テルレス少年は、このよけいなおせっかいのために、ふきげんな顔をした。するとバイネベルクは、気をよくして、ちょっとばかりいい気味だといわんばかりに、にやりと笑った。

「そもそも」と顧問官は、ほかのみんなに向かって言った。「諸君全部にお願いしておきたかったのですわ。万一わたしのむすこに何かがあったら、すぐわたしにお知らせいただきたいですな」

このひと言がついに、テルレス少年の口から、もううんざりしたといわんばかりの言葉を引きだした。「だけどパパ、ぼくにいったい何が起こるというんだい？」もっとも彼は、いつも別れの時には、この種の過大の配慮を辛抱しなければいけないことに、すでに慣れっこになってはいたのである。

ほかの連中は、そのあいだに、靴のかかとをかちっと合わせ、かわいらしい短剣をぴたりと手で押えたものである。顧問官はさらにつけ加えた。「何が起こるか、わかったものではない。だから、あらゆることをすぐに知らせてもらえると考えただけで、わたしにはたいそう安心なのだ。結局のところ、おまえだって、郵合で手紙を書けないことだってあるだろうからね」

やがて列車がはいってきた。テルレス顧問官はむすこを抱擁した。テルレス夫人は、涙をおしかくすために、ヴェールを顔にかたく押しつけた。友人たちは一人一人感謝の言葉をのべた。それから車掌が列車のドアを閉めた。

夫妻はもう一度、学校の建物の寒々とした高い背面を見やった。大きな、延々とのびた壁が庭をとりかこんでいる。つづいて列車の右と左には、暗褐色の畑と点在す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo